

稲作情報

No.5

TEL:018-860-3410

FAX:018-860-3834

生育前進傾向！ 生育状況に合わせた水管理と肥培管理の徹底を！

1 気象経過と生育状況

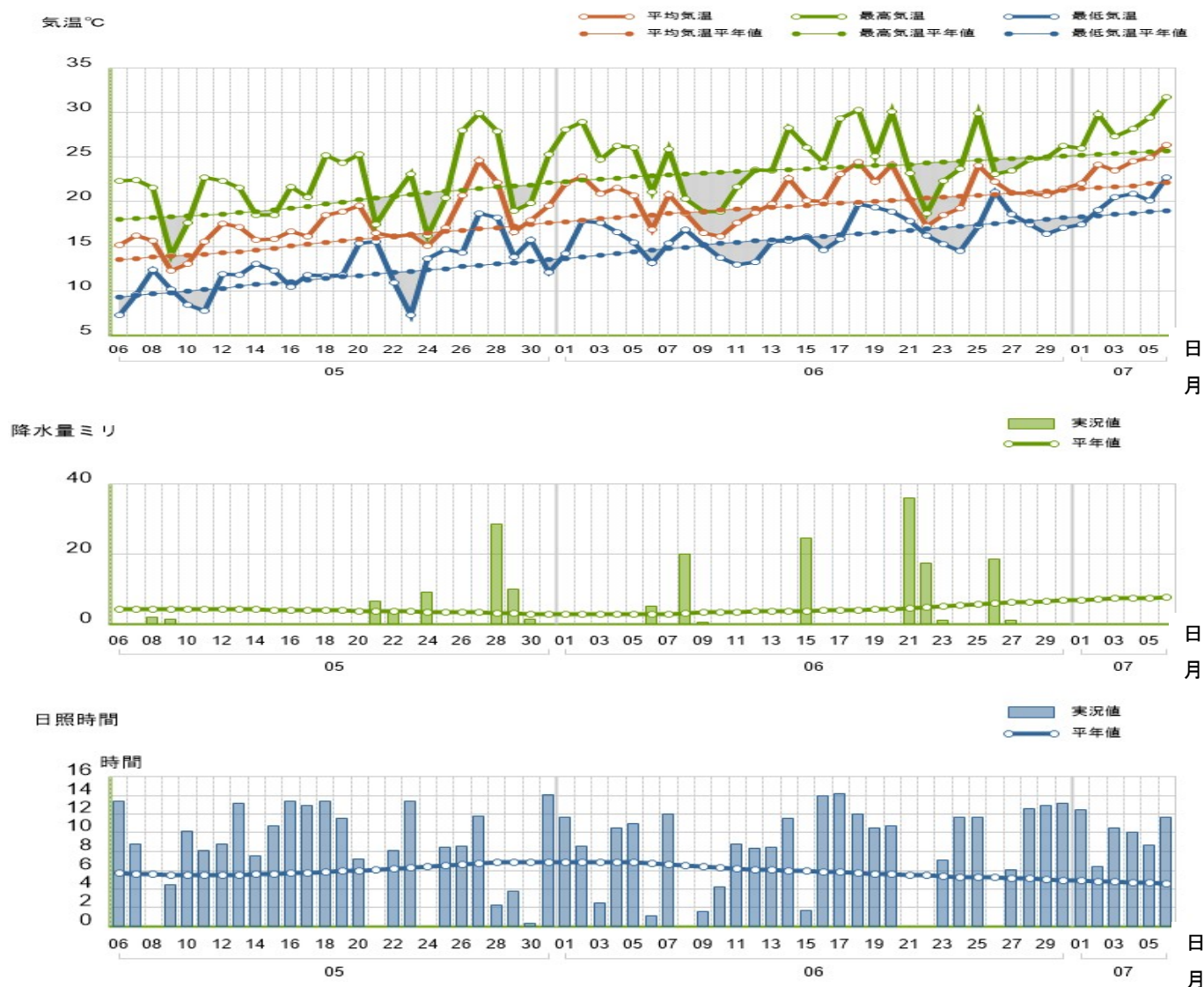


図1 気象経過と平年値（アメダス秋田、秋田県農業気象システムから引用）

〈気象と生育の概況〉

6月中旬以降、気温が高く、日照時間は多くなりました。

7月6日の定点調査結果（あきたこまち）は、草丈は 56.3cm（平年比 102%）とやや長く、茎数は 567 本/㎡（同比 119%）、葉数は 10.9 葉（同差+0.5 葉）といずれも多くなりました。葉色は 39.9（同比 90%）と淡い状況でした。

葉数が進んでいるほ場では、すでに幼穂形成期に入っています。生育状況のほ場間差が大きいため、生育に合わせた水管理や肥培管理及び病虫害防除等の適期作業に努めましょう。

表1 水稻定点調査結果（7月6日実施）

	本年	比較	
		平年比・差	前年比・差
草丈	56.3cm	102%	91%
茎数	567本/㎡	119%	121%
葉数	10.9葉	+0.5葉	+0.3葉
葉色（SPAD）	39.9	90%	92%

※ 管内定点ほ場 10 地点（あきたこまち）の平均値

2 中干しは幼穂形成期までに終了

表 アメダスデータを用いた「あきたこまち」の幼穂形成期予測※幼穂形成期：幼穂長 2mm の時期（出穂 25～30 日前）

アメダス 田植え日	秋田		男鹿		五城目		大潟		岩見山内		大正寺	
	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差	予測日	平年差
5月15日	7月6日	早4日	7月18日	早5日	7月9日	早3日	7月10日	早3日	7月10日	早3日	7月10日	早4日
5月20日	7月9日	早4日	7月20日	早4日	7月12日	早3日	7月13日	早3日	7月13日	早3日	7月13日	早3日
5月25日	7月12日	早4日	7月22日	早5日	7月16日	早2日	7月16日	早3日	7月16日	早2日	7月16日	早3日
5月30日	7月16日	早3日	7月24日	早5日	7月19日	早2日	7月20日	早1日	7月20日	早1日	7月20日	早2日

注) あきたこまち中苗移植、田植え翌日から7月6日まで各アメダス地点の平均気温実測値、それ以降は平年値を用いて推定。今後の天候によって予測日は前後する。平年差は田植えからの平均気温が平年値で経過した場合の幼穂形成期予測との差。

- ① 7月7日時点の予測では、**あきたこまちの幼穂形成期は1～5日程度早まる見込み**です。
- ② **幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了し、間断かん水に切り替えます。**

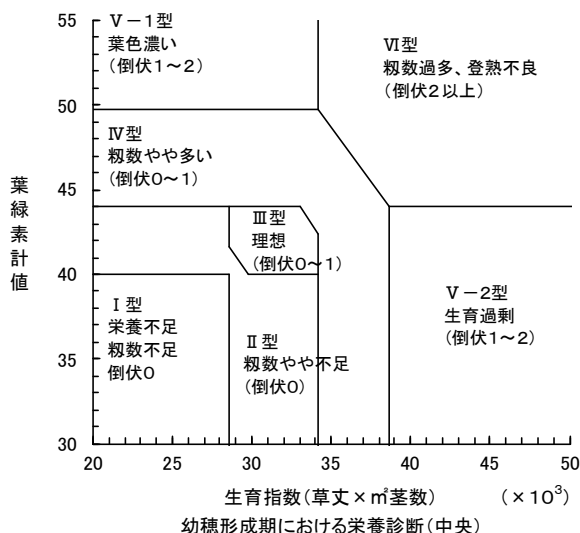
●中干し終了の目安

中干しは十分に乾かなくても幼穂形成期前に終了し、間断かん水に切り替えます。中干しが十分にできなかった場合や、生育量が不足して中干し開始が遅れたほ場では、中干し終了後の間断かん水で、落水期間をやや長めにし、徐々に田面が乾くよう努めます。直播栽培では転び型倒伏を防止するため、落水期間を長めにした間断かん水を行います。

- ③ 減数分裂期は出穂の10～12日前頃ですが、この時期は低温に弱い時期なので、日平均気温 20℃以下(最低気温 17℃以下)の低温が予想される場合は、深水管理(水深 15 cm以上に保つ)を行い、幼穂を保護します。
- ④ 減数分裂期から穂ばらみ期にかけて平均気温 20℃以下(最低気温 17℃以下)の低温が予想される場合は、冷害の危険性が増すため、幼穂形成期に入ったら水深 10 cm以上を深水管理(前歴深水管理)を10日間程度実施します。

3 あきたこまちの栄養診断(幼穂形成期追肥の判断)

- ① あきたこまちで幼穂形成期(幼穂長 2 mm)を迎えているほ場では、時期を逸せず生育・栄養診断を実施してください。草丈、茎数、葉色(葉緑素計値)のデータがあれば診断できます。
- ② **生育型がⅠ型またはⅡ型の場合は、窒素成分で 2kg/10a 以下を目処に追肥を行います。**
- ③ 幼穂形成期の生育型がⅥ型に該当する場合は、緊急処置として倒伏軽減剤の使用を検討します。
- ④ **肥効調節型肥料を基肥などで使用した場合、追肥は施用済み窒素成分量などを考慮し、慎重に判断します。**



生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
Ⅰ型	2kg	2kg
Ⅱ型	2kg	2kg
Ⅲ型	ムラ直し1kg	2kg
Ⅳ型	なし	2kg
Ⅴ-1型	なし	ムラ直し1kg
Ⅴ-2型	なし	ムラ直し1kg
Ⅵ型	なし	なし

注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

表 幼穂形成期(7月15日頃)における「あきたこまち」の理想生育量

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数	葉色(SPAD)	生育指数 ^{※1} (×10 ³)	栄養診断値 ^{※2} (×10 ⁵)
理想値	61	515	10.7	42	31.4	13.2
上限値	63	559	10.9	44	34.2	14.5
下限値	58	471	10.5	40	28.6	11.9

注)生育指数は草丈×茎数、栄養診断値は草丈×茎数×葉色(SPAD)で算出

4 病虫害防除対策 ※農作物病虫害発生予察情報発生予報第3号(7月予報)より

① 葉いもち(発生量: 平年並、発生時期: 早い)

- ・ ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認してください。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意しましょう。
- ・ 余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分してください。余り苗で発病が確認された場合、発病ほ場及び周辺ほ場では今後の発病状況に注意します。
- ・ これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、またはルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布してください。
- ・ 余り苗や感染苗の持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤またはノンプラス剤の茎葉散布を行ってください。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布しましょう。

② 紋枯病(発生量: 多い、発生時期: やや早い)

- ・ 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかで防除しましょう。その際、薬剤が株元に到達するように散布してください。
- ・ 粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使用していないほ場に限り使用します。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前です。
- ・ 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れないでください。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしないでください。

③ 斑点米カメムシ類(発生量: 多い、発生時期: 早い)

- ・ 水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長されます。発生雑草の草種や生育程度を観察して、適切な中・後期除草剤を選択し、雑草防除を徹底しましょう。
- ・ 稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に数回行いましょう。
- ・ 水田畦畔刈り込み軽減剤や水田畦畔刈り込み代用剤を散布すれば、40～50日の抑草効果が期待できます。

表 斑点米カメムシ類の本田防除と草刈り時期

	6月		7月		8月			9月		
	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
本田防除					1回目防除 ↔ 出穂期10日後頃		2回目防除※ ↔ 出穂期24日後頃			
農道・畦畔	↔					↔ 草刈り		↔		
法面・休耕田	↔ 草刈りの徹底			↔ 草刈り禁止				↔ 草刈りの徹底		
出穂15～10日前までに数回行う。水田内のイネ科、カヤツリグサ科雑草の穂はアカスジカスミカメの発生を助長するため除草対策を徹底する。				1回目の茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努める。				稲の収穫2週間前以降から草刈りを実施する。		

注)出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場やイネ科雑草が主体の牧草地・休耕田等に隣接するほ場、発生予察情報に基づき多発が予想される場合は出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を必ず実施する。

5 異常気象対策(高温、大雨)

7月2日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高く、特に期間の前半は気温が高くなる見込みとなっています。また、降水量と日照時間はほぼ平年並と予報されています。

今後、昨年のような高温や集中豪雨が発生する可能性もありますので、以下の対策を実施して異常気象に備えてください。

① 高温対策について

- ・ 水管理の徹底により稲体の活力を維持します。幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くほか、登熟が高温条件下で経過すると白未熟米やくさび米(黒点症状米)等の被害粒の発生が多くなることから、水管理を徹底して被害軽減に努めてください。
- ・ 出穂後10日間は湛水管理(水深5～6cm程度)とし、その後は間断かん水を基本としますが、最高気温が30℃以上となる場合は、用水の確保が可能であればかけ流しかん水を行ってください。かけ流しかん水が困難な場合(開花期後)は、落水期間の短い間断かん水やかん水を日中に行うなど、水分供給と地温の低下に努めてください。
- ・ 高温少雨の期間が長いと斑点米カメムシ類やその他害虫の発生が多くなりやすいほか、高温多湿の気象条件では、いもち病や紋枯病といった病害の発生が多くなります。前ページの病虫害防除対策を参照するほか、今後、病虫害防除所が発表する発生予察情報等を参考に防除対策を実施しましょう。

② 大雨対策について

- ・ 冠水・浸水した場合に速やかに排水されるよう、事前に排水溝や排水路の点検を行ってください。
- ・ 大雨により水路が増水している場合は、危険ですので絶対に近づかないでください。

6 熱中症対策

7月に入り、30℃を越える日が観測されており、熱中症のリスクが高まっています。のどが渇く前に水分補給を行い、同時に塩分も摂取しましょう。少しでも不調を感じたときは無理せず休むようにしてください。

次号は7月16日頃の予定です。